

# 明朝体の歴史

博多市(@hakatashi)です。

受験生です。

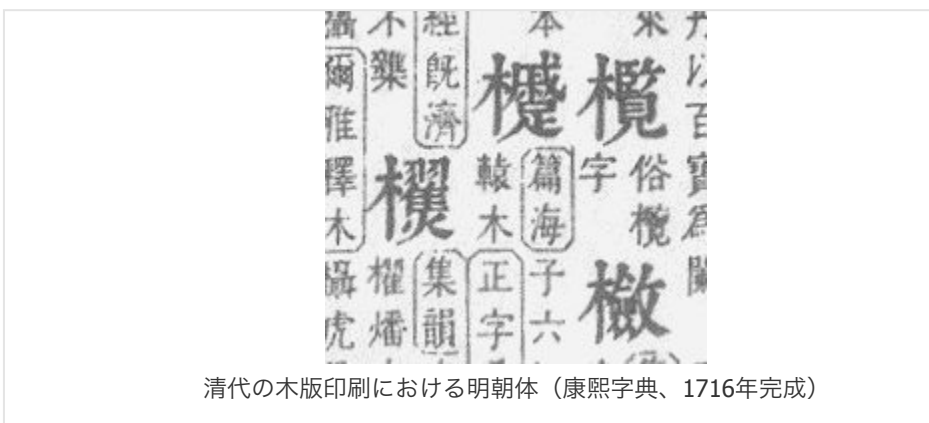
今回のKOFの出展に際して記事執筆の依頼があり、ちょうど半年ほど前にnpcaのブログに明朝体の仮名に関して掲載しようと目論んでいた記事があったのでそのままコピってきました。連載の最初という位置づけの文章ですが、単体で読んでも十分に読める内容なのではないかと思います。

というわけで、理系臭がプンプンするこの部誌の中、超文系ちっくな記事を投下します（前回もそんな感じだったけど）。

めんどくさいので受験生ゆえ時間がなくデザインも何も施していません。本当にコピー&ペーストしただけです。読みにくいでしょうが何卒ご了承を。

---

## 明朝体"かな"の起源



近世の中国において、**木板印刷**がひろく用いられるようになると、楷書体や行書体などの筆文字よりも、曲線が少なく彫りやすい印刷専用の字体が求められた。これを受けて明代から清代にかけて成立した書体が**明朝体**である。やがて一つの父型から大量の活字を生産できる**活版印刷**が発明されると、彫りやすい字体としての意義は薄れ、純粹にデザインの美しさを目的として明朝体が用いられるようになった。

日本では、明治2年（1869年）に、通詞（幕府直属の通訳者）の**本木昌造**が、上海で明朝体活字の普及に努めていたウィリアム・ギャンブルを招聘し、通詞らの間で西洋の活版印刷技術を学んだのが日本の活版印刷の始まりと言われている。本木らは1873年、日本で初めての活字製造所となる長崎新塾出張活版製造所（後の**東京築地活版製造所**）を結成した。

この前後に彼らは日本語活字、すなわち日本語でしか用いられない仮名や記号の字体を独自に考案する必要があった。当時の平仮名は個別に独立した文字ではなく、さらに前後にくる文字の種類によって字形も字体も大きく変化するものであったため、これらを統一された正方形の活字で管理することは簡単なことではなく、最終的に寺子屋のいろは手習いの字体を参考にして鑄造されたと言われている。

**かな** カエルタロー  
**漢字** 力工儿夕口一

明朝体のかなと漢字のデザインの違い。「A-OTF リュウミン EB」使用。

この字体は毛筆で書かれたものであるため、縦画と横画の太さの違いや**ウロコ**などを特徴とする明朝体活字とはデザイン的に全く異なるものであるが、これが漢字とマッチしているため、このデザインは現在に至るまで継続して使われ、通常「明朝体のかな」と言う際はこの時代に成立したデザインのかなのことを指す。

## 築地と秀英の二大活字時代



**築地明朝体初号**

游築初号かな（大日本スクリーン）

**秀英明朝体初号**

秀英初号明朝（モリサワ）

やがて活字が広く用いられるようになると、さきに述べた東京築地活版製造所（築地活版）に加え、秀英舎（現大日本印刷）という活版印刷所が台頭していった。秀英舎は明治15年（1882年）より製文堂にて自家製の活字を製造し始め、明治における明朝体活字の製造は主としてこの二つが担うこととなった。

この書体は現在では築地体・秀英体、あるいは築地明朝体・秀英明朝体と呼ばれており、現在フォントとして覆刻がされている物も多い。

## 活字の基礎知識

活字においては、号数という概念があることに注意する必要がある。

活字は、現在のDTPや写植のように文字の大きさを変更する、ということが容易にできない。よって活字においては文字の大きさと文字の形が一对一で対応しており、同じ書体においても文字の大きさによって異なる字体が作られた。この大きさの規格は号数と呼ばれ、一番大きい物が初号、その次が一号、二号、三号・・・という順に小さくなっていく。

基準とされた五号活字の大きさは現在の10.5ptに相当し、その他の号数の大きさはこれに対して簡単な整数比で表すことができる。ただし一号と四号の大きさは例外的に整数比が成り立たなかったため、のちの1962年制定のJIS規格により改訂された。なお、現在パソコンのワープロソフトなどで10.5ptが標準サイズとされるのはこれに由来している。

また、これらの活字は複数回にわたり改刻がされており、同じ書体、おなじ号数でも時代により全く異なる字形のものが存在する場合があることにも注意するべきである。

## ベントン母型彫刻機とA1書体

大正11年(1922年)に、細かい活字を容易に彫ることができる**ベントン母型彫刻機**が日本で初めて導入された。これにより活字の供給が増加したことを受けて、築地活版が倒産した。また、秀英舎が戦後ベントン彫刻機を導入した際に、専用の細い明朝体を開発した。この書体は社内で**A1書体**と呼ばれ、現在では**秀英細明朝体**という名で知られている。

※なお、A1書体はA1明朝とは異なる。

## 築地・秀英以外の明朝体活字

築地活版・秀英舎以外の活字メーカーによる明朝体活字も存在した。**岩田明朝体**は1920年に設立された岩田母型製造所（現在のイワタ）によって制作された。この書体はのちにモリサワおよび写研により写植書体として復刻され、現在は**イワタ明朝体**というデジタルフォントとして知られている。

また、1950年ごろ、モトヤ商店（現在のモトヤ）という活字メーカーにおいて**モトヤ明朝体**が制作された。

## 写真植字

1924年、ヨーロッパで研究がすすめられていた写真植字機を日本の石井茂吉と森澤信夫が実用化することに成功し、1926年**写真植字機研究所**（現在の**写研**）を設立した。やがて1960年以降、出版の技術は活字から写植へと置き換わり、それに伴いさまざまな写植の書体が開発されることになる。もちろん明朝体も例に漏れなかった。

## 写研の明朝体

写真植字機を発明した写研は、当初は築地や秀英の活字の書体を写真植字へと流用していたが、やがて写植専用の書体（写植書体）を独自に開発した。1933年に発表された**石井中明朝体**を始めとする**石井明朝体**が創業者石井茂吉によって制作され、写植黎明時代の印刷物を席卷した。この石井明朝体には活字書体をベースにしたOK(オールドかな)と新たな趣向でデザインされたNK(ニューかな)の二種類の字形のかなが存在し、用途に応じて使い分けることができた。

また、1975年に発表された**本蘭明朝**（1985年にウェイト展開）はより現代的な字形の明朝体で、写研の「第二の明朝体」として本文書体などに広く使われた。

## モリサワの明朝体

1948年、写研の創業者の一人である森澤信夫が写研を退社し、独自に**写真植字機製作株式会社**（現在の**モリサワ**）を創立、写真植字において写研に次ぐシェアを獲得することになる。モリサワの写植の明朝体のうち**太明朝体A1**、**見出明朝体MA1**、**見出明朝体MA31**、**太明朝体A101**、**リュウミン**の5書体は現在フォントとして利用でき、特にリュウミンは現在のモリサワを代表する書体の一つといえる。

## リョービの明朝体

1947年誕生した晃文堂（現在のリョービマジクス。2010年書体関連の業務を停止）は、欧文活字専門の活字メーカーだったが、1958年和文活字として晃文堂明朝を発表、これがのちに写植書体の**本明朝**として改刻された。

リョービは、写真植字においては写研、モリサワにつぐ第三のメーカーとして知られるが、独自に開発した書体は少なく、この時代のリョービの明朝体は本明朝のみが知られている。

## DTP到来

やがてMacintoshの台頭によりDTPの技術が導入されると、1987年モリサワがAdobeと提携し、いくつかの書体をフォントとして提供するようになった。

やがてはリョービも自社書体のフォント化を行うが、写研は「正しい文字組みが保証された環境を維持したい」という社風によりフォントの一般開放を行わず、現在では一般のデザイナーが写研の明朝体を使用することはできない。

これと同時期、日本でも書体のデジタル化の動きがあり、1988年には文字フォント開発・普及センターが設立され、翌1989年、この選考に応募されたリョービマジクスの新明朝体が入選し、同年が平成元年であることから**平成明朝体**と名付けられ開発が進められた。この書体はハライなどの先端の形状がカットされていることが特徴である。

## その後の明朝体

DTPの時代の到来により、それまで閉鎖的であった書体設計がオープンな場に置かれ、プロのみならずアマチュアでも多くの書体が作られるようになった。歴史ある明朝体の他にも、最初からデジタルフォントとして開発されたフォントの中で特筆すべきものを挙げる。

## ヒラギノ明朝体

写研の社員であった鈴木勉、鳥海修、片田啓一の3人によって設立された**字游工房**にて1993年に作られたフォント。Mac OS XではW3とW6の2つのウェイトが標準搭載されている。

## マティス

現在DTP環境においてモリサワに次ぐ第二位のシェアを持つ**フォントワークス**が1991年ごろ発表した書体。太字のデザインが特徴的。縦組み用に設計された**マティスV**もしばしば使われる。

## 筑紫明朝

フォントワークスが2003年ごろ発表した書体。現在フォントワークスを代表する明朝体である。

---

.....どうでしょうか。思いつきで書き始めた割には「活字→写植→DTP」の三世代に渡る明朝体の歴史を俯瞰できるいい内容になったのではないのでしょうか。一息ついたら書きなおして別のところでまた掲載し直すかもしれません。ではでは。